

## まえがき

本書は、2006年度に東京大学社会科学研究所が実施した岩手県釜石市における総合地域調査である希望学・釜石調査の一環として、新日鐵釜石製鉄所労働者OBに対して行われたオーラル・ヒストリーの記録『炎の記憶』の第2分冊である。この聞き取り調査は、2006年7月から9月にかけて、中村尚史、青木宏之、梅崎修、仁田道夫の4人が手分けをして行った。その手順や方法については、第1分冊（中村尚史・青木宏之・梅崎修・仁田道夫編『炎の記憶: 釜石製鉄所労働者のオーラル・ヒストリー I—製銑・製鋼・東海転出者編—』東京大学社会科学研究所、2011年）の「まえがき」に記したので繰り返さない。ここでは本書に収録したオーラル・ヒストリーの構成と主要なポイントを紹介することにした。

まず本書に収録した圧延部門（第1、2章）と設備部門（第3～6章）の労働者オーラル・ヒストリーの調査対象時期を一覧表にすると、以下の通りになる。

表1 調査対象期間

部門	章	氏名	調査対象時期
圧延	第1章	金野秀雄氏	1950年～1977年
圧延	第1章	浅沼長作氏	1948年～1988年
圧延	第2章	小笠原勇三氏	1954年～1990年
圧延	第2章	新沼司氏	1959年～1994年
設備（工作）	第3章	新張好光氏	1938年～1977年
設備（工作）	第4章	渡辺忠氏	1940年～1980年
設備（電気）	第4章	徳田駒蔵氏	1941年～1984年
設備（工作）	第5章	及川喜久男氏	1958年～1995年
設備（整備）	第6章	佐々木誠治氏	1966年～1999年
設備（整備）	第6章	中村英樹氏	1948年～1985年

設備部門では戦前入社世代（新張、渡辺、徳田の各氏）、高度経済成長以前入社世代（中村氏）、高度経済成長期入社世代（及川、佐々木両氏）と、3世代が揃い、各時代における製鉄所の作業現場の実態をつぶさにかがうことができた。一方、圧延部門では残念ながら戦前入社世代のお話がかがえなかったものの、高度経済成長以前入社世代（金野、浅沼両氏）と、高度経済成長期入社世代（小笠原、新沼両氏）から、検定や小形工場、大形工場、そして線材工場という圧延部門の各作業現場における技能の変遷や合理化にともなう配置転換の思い出などをうかがうことができた。

戦前入社世代にとって、記憶に残る大きな出来事は戦時中の艦砲射撃による製鉄所の壊滅と戦後の復興、そして大規模なストライキ（1957年と59年）である。これに対して高度経済成長期以前に入社した世代では、大形工場の閉鎖にはじまる合理化の過程や、それにとともなう配置転換、作業効率化といった点が中心的な話題であった。さらに高度経済成長期に入社した世代にとっては、高炉休止（1989年）後の製鉄所縮小の過程における出向や新規事業等での苦労話が大きな話題となっている。興味深いことに、第1世代にとって重要なトピックであったストライキは、第2世代の記憶にはあまり残っておらず、第3世代にいたっては話題にすら上らない。合理化の過程における苦労話は、3世代共通の話題であるが、やはり世代が下るにしたがって深刻度が増している。そもそも第3世代は40歳代半ばで高炉休止となり、新規事業への従事や出向、転出を余儀なくされた。

第1分冊、第2分冊あわせて計32名の現場労働者OBの方々の話をうかがう中で、彼らが世代を超えて大切にしてきたものが、「釜石製鉄所」という事業所そのものであったことに、あらためて気付かされた。本書によって、艦砲射撃によって壊滅した製鉄所を建て直し、厳しい事業所間競争を戦い抜き、東海転出とその後の合理化の過程を耐え、高炉の火が消えても釜石に製鉄所を残すために黙々と働き続けた人々の記憶を、歴史の一ページに留めることができるとしたら、これほどの喜びはない。

最後に、この場を借りて、インタビューにこたえてくださった釜石製鉄所OBの皆様、調査へのご支援をくださった釜石製鉄所、名古屋製鉄所、釜石鉄友会、あゆち会の皆様に深く御礼を申し上げます。

本書は、科学研究費補助金・特別推進研究「世代間問題の経済分析」（研究代表者・高山憲之一橋大学経済研究所教授、課題番号18002001）の成果の一部です。

2011年1月 編者一同